

「青年海外協力隊」

中村 将也

NAKAMURA Masaya

同僚に働き掛けながら共に目指す、子どもたちの自立

2年間、生活できるだろうか……。ベトナム語がほとんど分からず、不安な思いでスタートを切った青年海外協力隊生活。あれから1年半あまり、日々、障害児の自立を目指して、子どもたちと向き合い、現地の文化を尊重し、試行錯誤を重ねながら障害児教育の発展を後押ししてきた中村さんは、「ベトナムでの経験のおかげで、今後は困難にぶつかっても、乗り越えられる気がします」と力強く語る。

中村さんが活動するのは、ハノイ市バビ郡トゥイア

PROFILE

1983年京都府出身。大学で福祉と国際協力を学んだ後、大学院で英語教育を専攻。卒業後、盲学校や特別支援学校に勤務。2014年6月から青年海外協力隊(障害児・者支援)としてベトナムで活動中。

JICA Volunteer Story



生活訓練室での個別指導で、身体に麻痺のある子どもに手指の動かし方の訓練をする中村さん

「障害児の自発的な行動を後押ししたい」

ベトナムで障害児の自立を手助けしている中村将也さん。子どもたちの成長と現地の障害児教育の充実を目指し、日本で培った特別支援教育の知見を生かしながら、日々、奮闘している。



ベトナム
ハノイ市バビ郡

ン村にある、トゥイアン障害児リハビリテーションセンターだ。脳性麻痺や聴覚障害、知的障害、自閉症など、障害のある子どもたち約200人がここで生活している。中村さんの主な仕事は、自閉症の子どもたちのクラスを巡回しながら、現地の教員に障害児教育の理論や教授法を伝えることだ。忙しい仕事の合間を縫って知的障害児のクラスにも顔を出し、スプーンの使い方など、日常生活に必要な動作の訓練についての指導法をアドバイスすることも多い。センター内に住んでいることもあり、同僚ともすつかり打ち解けている。

「赴任して感じたのは、ベトナムの障害者福祉の現状は、日本の40〜50年前のような状況だということです」。中村さんは、教材や人材が不足している中、常に、「どうしたら子どもたちがより自立し、自発的に行動できるようにするか」という視点を大切にしながら授業の内容を組み立てている。例えば、現地では、言葉によるコミュニケーションが困難な障害児の授業は、発声や会話の練習が一般的だったが、中村さんは、写真や絵カードを使って子どもが自分の要求や意思を伝える方法を取り入れた。教員側が子どもに何か伝えるときも、同様に絵カードを使うことで、音声言語だけに頼っていたときよりも容易に、そして具体的に意思疎通ができるようになったという。

子どもの理解や成長を促すためには、障害児教育を担う現地の教員のスキルアップも重要だ。中村さんが同僚を集めて教授法や教材作りのセミナーを開くと、「もっと知りたい」「どうやったらより効果的に教えられるの」と、教員たちも意欲的に参加してくれた。「その一方で、教員数が少ないため、教材を作る時間がない」といった声も多いんです。そういう時は、一緒に一日の活動の流れを見直し、どう時間を捻出するか考えるようにしています」と中村さんは話す。



a. 子どもたちは元気いっぱい。センターには、刺繍や造花、洋裁などさまざまなスキルを教える部署もある
b. 現地教員向けのセミナーで、絵カードを使ったコミュニケーション方法を紹介し、一緒に練習した
c. 自閉症クラスでは、日常生活をスムーズに送れるよう教室の環境を整備することも重要だ。仕切りを設けた靴箱にそれぞれの顔写真を貼ると、一人で正しい位置に靴を出し入れできるように
d. 同じ色の穴に串を刺す、自閉症クラス向けの教材。色の見分けと、手の力の調整の2つの練習となる

身近に芽生えた福祉への関心 活躍の場は世界へ

ベトナムの障害児教育発展に力を注いでいる中村さんが福祉の分野を目指すようになったのは、大学進学時のことだ。「祖父が全盲で、外出するたびに不便を感じたり、周囲の目が気になったりして、福祉を学びたいと思うようになったんです」と中村さんは振り返る。加えて、中学時代にボイスカウトでニューヨークの国連本部を見学したことや、高校時代の留学経験から、国際協力にも関心を持ち、高齢化や貧困など、世界に共通する社会の課題を学びつつ、地域に合った福祉の在り方を考える「地域福祉」を研究した。さらに、教職の科目も履修していた中村さんは、大学院時代に特別支援教育の教育実習に参加。「子どもたちのがんばる姿や、何かを達成したときの笑顔を見て、彼らが社会に飛び立つための手助けをしたいと強く思うようになったんです」

障害のある子どもたちは、ゆつくりと時間をかけて成長していく。それぞれの成長に合わせて、個別に課題を設定していく中村さんの指導法は、現地の教員にとっては慣れない方法だ。その意義を理解して実践に結び付けてもらうために、これまで根気強く活動を続けてきた。青年海外協力隊としての2年間の任期満了が少しずつ近づくと、中村さんは、「やっと、子どもたちの行動に結果が表れ始めてきました」と喜ぶ。赴任当初から積み重ねてきた努力が実り、子どもたちのコミュニケーションの幅が広がり始めたのだ。中村さんや同僚の教員たちの情熱に支えられて、子どもたちは自分の足で人生を歩んでいくために一歩ずつ成長を続けている。